

## 韓国合宿を終えて

—— 赤茶色の風土をゆく ——

津 田 僚 一

3月8日朝、龍仁(ヨンギン)の町はずれで藤本隊員と別れる。以後一人である。心細いという気持はなく、これからどうなるのかというような期待と不安が秘かな興奮をかりたてる。

一旦町を出てしまうと、あとは見わたす限り田畑の中の街道をゆく。ただし「見わたす限り」というのは、非常に広いという意味ではなく家がまるで見当たらないということであり、田畑といってもそれは一面の枯山野である。街道の両脇にはポプラに似た木が天に向かってはだかの枝を向けて並んでいる。

脚のそこいらがいたい。昨日は廣州(クワンジュ)から龍仁までの28キロメートルを少々飛ばしすぎたせいであろう。おりからの乾燥と強風は、街道一未舗装道一を滅茶苦茶に飛ばすバスと共謀して、この旅人に砂ぼこりをいやという程あびせる。ここにきて、なるほど独りで歩いているんだなあ—とあらためて実感する。この気持の中に多少のセンチな心理を含んでいることは否定できないだろう。

ずいぶんスローペースで歩いていると、やがて道が鉄道に沿ってしまった。地図を見て、その日の宿泊予定地—竹山里(チュクサンリ)に対して大幅に遠まわりしているのを知ったが、引き返すわけにもゆかず、そのまま行く。やがて部落が見える。部落へ入ろうとする手前で警官らしき男がこちらに向かってやってくる。予想通りに呼びとめられる。

相手が何を言っているのか、さっぱりわからず

「イルボネソクスムニダ(日本から来た)」を連発する。ポリス・ボックスにつれて行かれ、そこには銃がずらりとならべられていた。ところがそれを見ても何の脅威もなく、精巧なおモチャ以外の何ものにも想えなかった。それはおそらく、私が平和国日本に育ったせいであろう。そして裏返していえば、今日韓国の置かれている状況のきびしさなのだが、当時そのような緊迫感を持つことはできなかった。

警官はバスで行くように言った。足も痛むことであるし、また翌日には清州(チョンジュウ)に行かなければならなかったので、清州の手前30キロメートルの町—鎮川(チンチョン)まで行くことにした。

峠をいくつか越えて、バスが鎮川に着いた時、陽は西に傾いていた。街道の西側に南北200メートル程、商店やら露店が並んでいる。肉屋では豚が丸のままつるされている。バスの停留所は北の端にある。旅館をさがしながら町を南に下っているといつのまにか町の出口に出てしまう。私の歩いたコースにおいて、ポリスボックスはほとんど町の南端にある。この町も例にもれず、町の出口—南端にポリスボックスがあった。うっとうしいとは思ってみたが、あたりも薄暗くなるので、それでポリスボックスには必ず日本語を話せる人がいるので、ポリスボックスに入る。

毎度同じ質問がくりかえされる。途中「まあ飲め」といって湯呑みについでくれた液体を色具合からみて、てっきりお茶だと思って飲むと、何と

酒だった。酒は出るは、つまみは出るは、煙草は出るはで少々恐縮するのだが、彼らの投げかけてくる質問の中には非常にきびしいものがあった。北朝鮮の事や朝鮮戦争等の問題は己れの勉強不足を恥じるのみである。恥じる事によって、このよそ者は、この国のきびしい現実を少しでも肌で感じたらう。

一時間位の尋問の後、警官が旅館に連れていってくれる。朝食飯ぬきで腹ペコであったのだが、十何皿も出されるととても食べ切れなかった。夕食後宿の主人が部屋にやって来て「話をしよう」というのである。その人は国民学校6年の時まで日本語を習っていたと言った。はじめのうち何ともひどい日本語だったが、話すにつれて目に見える程流暢になってゆく。「日本に軍隊はあるか。」「天皇はどうしてるか。」彼は言葉が自由になるにつれて「日本は何故キタに物を売るか。」と政府の政経分離策が非難されるに到り、思わず絶句する。

翌朝は8時に出発した。夜、雪が降ったらしく道にうっすらと積もっていた。空気は冷たく湿っており、まさに歩くには最適のコンディションである。天候にまかせてピッチをかせぎ、5時頃30キロメートル地点清州に着いた。歩くには歩いたが途中、ほとんど人と話さずに警官に呼ばれることもなくきたのだが、何かたよりない感じが胸中をかすめる。人と接していれば、歩けず、ただ歩いていれば人と接せない。とにかく難しい。その夜は駅前の旅館にとまる。

3月10日。今日も晴れている。こうなると無神論者としても誰かに感謝したい気持ちになる。9時30分出発—このような都会？ともなると街をぬけ出すのに一苦勞する。通りがかりの人を止めて聞いてみる。すると彼は私をすぐ日本人だと見破り「ティー・ルームへ行こう。」と言う。相手

の非常に楽しそうな顔を見「はい。」ということになる。出された玉子入りコーヒーをガマンしながら飲む。彼は高麗人の優位を説く。日本の古代の文化を築いたのは韓人である。「ナラ」というのは韓国語の「都」という意味だそうだ。そして彼、曰く「やがて韓国は日本を追いこすだろう。」

茶房を出たのは一時間位後の事である。大通りでは今日が韓国のメーデーだということで、デモを行っていた。実に物静かなデモであり、盛大に出来ない事情を思う。彼に道を教えてもらって別れた。街を出るには少々苦勞したが、ここも一旦出てしまうと相も変らぬ田園風景である。バスが行き、シンジン・コロナが行き、牛車がクソをたれながらやって来る。日本なら中学校へ行くべき年頃の少年が大八車にイモアメを並べ、それを切るハサミをチョキン、チョキン鳴らしながら押している。一本10ウォンである。少年はわざわざ長い目を選んでとつてくれた。私はこの少年に何か言ってやりたい衝動にかられたが「カムサハムニダ(ありがとう)。」「と言うのがやっとだった。

その夕刻、大田(テジョン)市に到着。ソウルの校友会で紹介された大田市商工会議会長、李雄烈氏との面会がかなった。追い返されるのではないかと心配したが、氏は夜がふけようとする中快く会っていただけた。その夜は氏の御厚意で宿、食事を世話になり、ホテルのバスに入りながら、他の者はどうしたのかなあなどと思ってみる。

翌日は、氏が多忙ゆえあいさつして別れたのが昼前であった。駅前のバスターミナルへ行行って永同(ヨンドン)行きのバスに乗ることにする。こちらが日本人だとわかると、バス会社の人は、私がいまにみすばらしいかっこうをしているので、無銭旅行者と思ったらしく無賃で乗せてもらった。

酒だった。酒は出るは、つまみは出るは、煙草は出るはで少々恐縮するのだが、彼らの投げかけてくる質問の中には非常にきびしいものがあった。北朝鮮の事や朝鮮戦争等の問題は己れの勉強不足を恥じるのみである。恥じる事によって、このよそ者は、この国のきびしい現実を少しでも肌で感じたらう。

一時間位の尋問の後、警官が旅館に連れていってくれる。朝昼飯ぬきで腹ペコであったのだが、十何皿も出されるととても食べ切れなかった。夕食後宿の主人が部屋にやって来て「話をしよう」というのである。その人は国民学校6年の時まで日本語を習っていたと言った。はじめのうち何ともひどい日本語だったが、話すにつれて目に見える程流暢になってゆく。「日本に軍隊はあるか。」「天皇はどうしてるか。」彼は言葉が自由になるにつれて「日本は何故キタに物を売るか。」と政府の政経分離策が非難されるに到り、思わず絶句する。

翌朝は8時に出発した。夜、雪が降ったらしく道にうっすらと積もっていた。空気は冷たく湿っており、まさに歩くには最適のコンディションである。天候にまかせてビッチをかせぎ、5時頃30キロメートル地点清州に着いた。歩くには歩いたが途中、ほとんど人と話さずに警官に呼ばれることもなくきたのだが、何かたよりない感じが胸中をかすめる。人と接していれば、歩けず、ただ歩いていれば人と接せない。とにかく難しい。その夜は駅前の旅館にとまる。

3月10日。今日も晴れている。こうなると無神論者としても誰かに感謝したい気持ちになる。9時30分出発—このような都会？ともなると街をぬけ出すのに一苦勞する。通りがかりの人を止めて聞いてみる。すると彼は私をすぐ日本人だと見破り「ティー・ルームへ行こう。」と言う。相手

の非常に楽しそうな顔を見「はい。」ということになる。出された玉子入りコーヒーをガマンしながら飲む。彼は高麗人の優位を説く。日本の古代の文化を築いたのは韓人である。「ナラ」というのは韓国語の「都」という意味だそう。そして彼、曰く「やがて韓国は日本を追いこすだろう。」

茶房を出たのは一時間位後の事である。大通りでは今日が韓国のメーデーだということで、デモを行っていた。実に物静かなデモであり、盛大に出来ない事情を思う。彼に道を教えてもらって別れた。街を出るには少々苦勞したが、ここも一旦出てしまうと相も変らぬ田園風景である。バスが行き、シンジン・コロナが行き、牛車がクソをたれながらやって来る。日本なら中学校へ行くべき年頃の少年が大八車にイモアメを並べ、それを切るハサミをチョキン、チョキン鳴らしながら押している。一本10ウォンである。少年はわざわざ長い目を選んでとってくれた。私はこの少年に何か言ってやりたい衝動にかられたが「カムサハムニダ(ありがとう)。」「と言うのがやっとだった。

その夕刻、大田(テジョン)市に到着。ソウルの校友会で紹介された大田市商工会議会長、李維烈氏との面会がかなった。追い返されるのではないかと心配したが、氏は夜がふけようとする中快く会っていただけた。その夜は氏の御厚意で宿、食事を世話になり、ホテルのバスに入りながら、他の者はどうしたのかなあなどと思ってみる。

翌日は、氏が多忙ゆえあいさつして別れたのが昼前であった。駅前のバスターミナルへ行って永同(ヨンドン)行きのバスに乗ることにする。こちらが日本人だとわかると、バス会社の人は、私がいまにみすばらしいかっこうをしているので、無銭旅行者と思ったらしく無賃で乗せてもらった。

永同の旅館では宿の青年と英語で話した。日本において、外人に話しかけられたりしてともすれば逃げ出すような私であったが、ここにおいて、彼とのコミュニケーションの手段は英語しかなく、恥も外聞もなく単語をつなぐ。これで十分なのだ。これが外国語をものにする最上の手段なのだ。結論である。

永同を出て金泉に向かう途中でソウル 釜山間高速道路の工事現場と並行して歩く。名前は高速道路であるが片道二車線の規模のもので、メインロードにしてはチャチである。この道路は韓国の産業がおのずから欲した道路ではなく、軍事道路としての意味が強いのであろうが……。それにしても日本にあるものはほとんど韓国にもあるが、その各々を較べると一名ばかりのものがいかに韓国に多いことか。北に向かってにらむ張子のトラの国。しかし日本はいままで、東南アジアの国々をいかに喰いものにしてきたか。彼らの犠牲の上にいかにあぐらをかいてきたか。よく言われた事であり、最も考えさせられた事である。

金泉では、いかがわしい宿に泊まる。翌13日、朝少々トラブルがあり後味悪く宿を出る。「外国人だからといって親切にされるのが当前と思うのは大まちがいなんだ、甘えるな。」と自分に言いかけながら、道を南へ南へとる。マラソンでいう中盤の苦しさに当たるかもしれない。

道は細くて、ズタズタに小川に寸断されている。もちろん小川には橋はなく、わずかばかりの飛石が置いてあるだけである。そんな道を歩いてゆくのだが、一つの気がかりが頭をもたげる。いつも、砂ぼこりをあびせる憎い奴 バスがいつまでも通らないのだ。太陽も南中してきた（実はソウル出発当時、時計をこわしてしまったので太陽を基準にするしかない）。路傍の小川で洗濯している

女の人に身ぶり手ぶりで聞いてみる。「バスはない。」と知っているらしい事がわかる。次の宿泊地—高霊までは30キロメートル余りである。いざとなれば、民家にでも泊ろうとヤケクソ気味で歩きつづける。

1時間程歩いたろうか、部落に入る。前方より迷彩服を着た青年がやってくる。どうやら私が目当てらしい。この時ばかりは、私目当てでありますようにと祈ったものだ。青年は非常に大きな声で話しかけてくるので、いささか度肝をぬかれた。（後で聞いたのだがこのあたりの言葉の傾向らしい。）私はどもりながら「日本から来たものであるが、この道にはバスが通っていないのか。」とたずねる。彼は「ない。」といったらしく、それに対して困ったような顔を見ると、しばらく考えて「GO MY HOME、！」と言った。この時の顔にはだせぬうれしきは、とても書けるものではない。

彼の家は農家である。あたり前だが彼は郷土予備軍の兵士である。名前は都正雄。広島生まれという。彼が2才の時に韓国に来たのだそうだ。彼のお母さんがほんの少し日本語がわかる。父親はすでにない。

農家の朝は早い。出発する前に、疲れるだろうといって精力剤（ドリンク）や腹がへるだろうと食べるものをくれた。電気もない、たしかに貧しい生活だ。けれども、心から私をもてなしてくれた素朴な人々。都会人が忘れては絶対にならないものをこの家族の人達は教えてくれた。助馬という村のでき事。

残すところ2日。天候も気持も晴ればれと進む。予定を大幅に変更して、この日は高霊にとまり、翌日は朝、海印寺によって大邱に向かい、そして翌々日釜山に到着することにした。

（社会学部4回生）